

主部が定係数双曲型である作用素について

筑波大 数学系 若林誠一郎

序. 主部が定係数である微分作用素

$$P(x, D) = P_m(D) + \sum_{j=0}^{m-1} Q_j(x, D), \quad Q_j(x, D) = \sum_{|\alpha|=j} a_{\alpha}(x) D^{\alpha},$$

$$x = (x_1, \dots, x_n), \quad D = -i(\partial/\partial x_1, \dots, \partial/\partial x_n)$$

に対する Cauchy 問題を考える。ここで、 $P_m(\xi)$  は  $m$  次齊次多項式であり、 $\nu = (1, 0, \dots, 0)$  方向を時間方向とみる。 $C^{\infty}$  の category では、定係数の場合 ( $P(\xi) \equiv P(x, \xi)$ ) には、Gårding [3][4] によって  $C^{\infty}$ -well posed であるための必要十分条件が得られている。また、Atiyah-Bott-Gårding [1] によって解の波面集合の評価と与えられている。低階が変係数の場合には、Dunn [2] によって  $C^{\infty}$ -well posed であるための十分条件が与えられた。解の波面集合の評価も得られている ([12])。低階が変係数である場合、Svensson [11] の結果が重要な役割を果たす。Gevrey class では、Larsson [10] が定係数作用素に対して well-posed であるための必要十分条件を与えた。ここでは、定係数の場合に Gevrey class

での Svensson の結果に対応する定理を与え、解の波面集合の外側からの評価を与える。また、低階変係数の場合には、Dunn の与えた条件が  $C^\infty$ -well posed でありかつ有限伝播性をとつための必要条件でもあることを示し、係数が解析的であるとす、Gevrey class において well-posed であるための必要条件(必要十分条件)を与える。さらに、解の波面集合の外側からの評価も考察する。

$K \subset \mathbb{R}^n$ ,  $1 < k < \infty$  とし、 $\mathcal{E}^{(k)}$  (resp.  $\mathcal{E}^{\{k\}}$ ) を次のように定義する:

$$f \in \mathcal{E}^{(k)} \text{ (resp. } \mathcal{E}^{\{k\}} \text{)}$$

$\iff$   
def

$$\forall K: \text{compact}, \forall h > 0 \exists C \text{ (resp. } \exists h > 0, \exists C) \text{ s.t.} \\ \sup_{x \in K} |D^\alpha f(x)| \leq C h^{|\alpha|} (|\alpha|!)^k$$

また、 $\mathcal{E}^{(\infty)} = \mathcal{E}^{\{\infty\}} = \mathcal{E} (= C^\infty)$  と形式的に書くことにする。以下、 $*k$  によつて  $(k)$  または  $\{k\}$  を表わすものとする。 $\mathcal{D}^{*k}$  を  $\mathcal{D}^{*k} \equiv \mathcal{E}^{*k} \cap C_0^\infty$  によつて定義する。 $\mathcal{E}^{*k}, \mathcal{D}^{*k}$  の位相については、Komatsu [8] に詳しく述べられている。 $\mathcal{D}^{*k}$  の共役空間として ultradistribution の空間  $\mathcal{D}'^{*k}$  を定義する。

Part I 定係数作用素 ( $P(\xi) \equiv P(x, \xi)$ )

### 1.1. Cauchy 問題.

定義 1.1.  $P(D)$  が hyperbolic of class  $*k$  w.r.t.  $\mathcal{D}$

$\Leftrightarrow$   
def

$\exists K (\subset \mathbb{R}^n)$ : 閉凸錐,  $\exists E(x) (\equiv E(P, \nu; x)) \in \mathcal{D}^{*K}$  st.

$$K \setminus \{0\} \subset \{x \in \mathbb{R}^n; x \cdot \nu > 0\},$$

$$P(D)E(x) = \delta(x), \quad \text{supp } E(x) \subset K \quad //$$

$P_m(\xi)$  が  $\nu$  に関して双曲型であるとする。  $\Gamma$  を  $\mathbb{R}^n \setminus \{0\}$  の錐とし、  $\xi^0 \in \mathbb{R}^n \setminus \{0\}$  とする。 そのとき、

$$\delta(P; \Gamma) \equiv \delta(\Gamma) \equiv \inf \{ \delta; \delta \geq 0 \text{ かつ } \exists \gamma > 0 \text{ st.}$$

$$P(\xi - i s (1 + |\xi|) \delta \nu) \neq 0 \text{ for } \forall \xi \in \Gamma, \forall s > \gamma \},$$

$$\delta(P; \xi^0) \equiv \delta(\xi^0) \equiv \inf \{ \delta(\Gamma); \Gamma \text{ は } \xi^0 \text{ の錐近傍} \}$$

によって  $\delta(\Gamma)$ ,  $\delta(\xi^0)$  を定義する。

補題 1.2.  $\xi^0$  の錐近傍  $\Gamma_0$  が存在して、  $\delta(\xi^0) = \delta(\Gamma_0)$  が成立する。 さらに  $\delta(\xi^0)$  は有理数で、  $\xi^0$  が  $\mathbb{R}^n \setminus \{0\}$  をうごくとき有限個の値しかとらない。 //

証明は、系

$$\begin{cases} P(\xi - i s \nu) = 0, \\ |\xi|^2 = r^2, \quad r > 0, \\ |\xi - r/|\xi^0| \xi^0| \leq \varepsilon^2 r^2, \quad 0 < \varepsilon \leq \varepsilon_0 \end{cases}$$

に対して、 Seidenberg の補題を適用することによってなされる。

$$\delta(P) \leq \max_{|\xi|=1} \delta(P, \xi)$$

とおく。

命題 1.3 ( $x = \infty$  のとき Gårding [3], [4],  $1 < x < \infty$  のとき Larsson [10]).  $P(D)$  が hyperbolic of class  $(x)$  (resp.  $\{x\}$ ) w.r.t.  $\mathcal{V} \iff$

(i)  $P_m(\xi)$  が  $\mathcal{V}$  に関して双曲型でありかつ、

(ii)  $x \leq 1/\delta(P)$  (resp.  $x < 1/\delta(P)$ ). //

1.2. 双曲型多項式.  $H(\xi)$  を  $m$  次斉次多項式とし、 $\mathcal{V}$  に関して双曲型であるとする。さらに、 $S(\xi)$  を  $m'$  次斉次多項式とする。但し、 $m' < m$  とする。  $\xi^0 \in \mathbb{R}^n \setminus \{0\}$  に対して、

$$N_{\xi^0} \equiv \left\{ \hat{\eta}(s); \hat{\eta}(s) = s^{-1} \left( \xi^0 + \sum_{j=1}^{\infty} s^{j/l} \xi^j \right), \xi^j \in \mathbb{R}^n, l \in \mathbb{N}, \right. \\ \left. s \hat{\eta}(s) \neq s=0 \text{ の近傍で収束} \right\}$$

とおく。

定義 1.4.  $\tau(s)$  を  $(0, s_0]$  で定義された函数とし、

$$\tau(s) = a s^d (1 + o(1)), \quad s \rightarrow +0, \quad a \neq 0$$

をみたすとする。そのとき、order  $\tau(s) = d$  と定義する。

$\hat{\eta} \in N_{\xi^0}$  に対して

$$n(H, S; \hat{\eta}) \equiv n(\hat{\eta}) \leq -\text{order} \frac{S(\hat{\eta}(s) - i\mathcal{V})}{H(\hat{\eta}(s) - i\mathcal{V})}$$

$$n(H, S; \xi^0) \equiv n(\xi^0) \leq \sup_{\hat{\eta} \in N_{\xi^0}} n(\hat{\eta})$$

とおく。さらに、 $\mathbb{R}^n \setminus \{0\}$  の錐  $P$  に対して

$$n(H, S; P) \equiv n(P) \leq \inf \{ k; \left| \frac{S(\xi - i\mathcal{V})}{H(\xi - i\mathcal{V})} \right| \leq \exists C(1+|\xi|)^k \text{ for } \forall \xi \in P \}$$

と定義する。 //

補題 1.5. (i)  $\xi^0$  の錐近傍  $\Pi_0$  が存在して、 $n(\xi^0) = n(\Pi_0)$  が成立する。(ii)  $m' - m + \deg H_{\xi^0} - \deg S_{\xi^0} \leq n(\xi^0) \leq m' - m + \deg H_{\xi^0} \leq m'$ . (iii)  $S(\xi^0) \neq 0 \Rightarrow n(\xi^0) = m' - m + \deg H_{\xi^0}$ . (iv)  $H(\xi^0) \neq 0 \Rightarrow n(\xi^0) = m' - m$ . (v)  $H, S$  が互いに素であるとする。  $H(\xi) = h_1(\xi)^{j_1} \cdots h_\mu(\xi)^{j_\mu}$  と因数分解して、 $R(\xi) = h_1(\xi) \cdots h_\mu(\xi)$  とおく。もし、 $\frac{\partial}{\partial \xi_1} R(\xi^0) \neq 0$  ならば、 $n(\xi^0) = m' - m + \deg H_{\xi^0}$  である。ここで、 $H_{\xi^0}(\xi) (\neq 0)$  は  $H$  の  $\xi^0$  における localization である。

$$H(s^{-1}\xi^0 + \xi) = s^r (H_{\xi^0}(\xi) + o(1)), \quad s \rightarrow 0$$

によって定義される。 //

(i) はやはり Seidenberg の補題を用いて証明される。そのとき、Svensson [1] の議論が必要とされる。

定理 1.6 (Svensson の結果の拡張).  $P_m(\xi)$  が  $\mathbb{C}$  に関して双曲型であると仮定する。そのとき、 $\xi^0 \in \mathbb{R}^n \setminus \{0\}$  に対して、

$$\begin{aligned} & \max(\delta(P; \xi^0), \delta(P; -\xi^0)) \\ &= \max_{0 \leq j \leq m-1} \frac{n_+(P_m, Q_j; \xi^0)}{m-j + n_+(P_m, Q_j; \xi^0)}. \end{aligned}$$

特に

$$\delta(P) = \max_{|\xi|=1, 0 \leq j \leq m-1} \frac{n_+(P_m, Q_j; \xi^0)}{m-j + n_+(P_m, Q_j; \xi^0)}$$

である。ここで、 $n_+(P_m, Q_j; \xi^0) = \max(0, n(P_m, Q_j; \xi^0))$ .

注意) Svensson の結果は次のものである:

$$\delta(P) = 0 \iff$$

$$\left| \frac{Q_j(\xi - i2^j)}{P_m(\xi - i2^j)} \right| \leq C, \quad \forall \xi \in \mathbb{R}^n, 0 \leq j \leq m-1$$

( $\Leftrightarrow \eta_+(P_m, Q_j; \xi) = 0, \forall \xi \in \mathbb{R}^n, 0 \leq j \leq m-1$ ). //

証明は [13] を参照されたい。

1.3. 波面集合.  $\kappa_1 > 1$  とし. Paley-Wiener型定理 (Komatsu [8], [9] 参) を考慮して,  $f \in \mathcal{D}^{* \kappa_1}$  に対する波面集合を次のように定義する.

定義 1.7.  $(x^0, \xi^0) \in T^*(\mathbb{R}^n) \setminus 0, \kappa_1 \leq \kappa < \infty$  とする.

(i)  $(x^0, \xi^0) \notin WF_{* \kappa}(f)$

$\stackrel{\text{def}}{\Leftrightarrow}$

$U: x^0$  の近傍,  $\Gamma: \xi^0$  の錐近傍が存在して, 任意の  $\varphi \in \mathcal{D}^{* \kappa_1}(U)$  に対して, 次の成立する:

$\forall L > 0, \exists C (*\kappa = (\kappa)$  のとき) ( $\exists L > 0, \exists C (*\kappa = \{\kappa\}$  のとき)) s.t.

$$|\mathcal{F}[\varphi f](\xi)| \leq C \exp[-L|\xi|^{1/\kappa}], \quad \xi \in \Gamma.$$

(ii)  $(x^0, \xi^0) \notin WF^{* \kappa}(f)$

$\stackrel{\text{def}}{\Leftrightarrow}$

$U: x^0$  の近傍,  $\Gamma: \xi^0$  の錐近傍が存在して, 任意の  $\varphi \in \mathcal{D}^{* \kappa_1}(U)$  に対して, 次の成立する:

$\exists L, \exists C (*\kappa = (\kappa)$  のとき) ( $\forall L > 0, \exists C (*\kappa = \{\kappa\}$  のとき)) s.t.

$$|\mathcal{F}[\varphi f](\xi)| \leq C \exp[L|\xi|^{1/\kappa}], \quad \xi \in \Gamma.$$

$$(iii) (x^0, \xi^0) \notin WF_{(\infty)}(f) = WF_{\{\infty\}}(f) = WF(f) \text{ (resp. } \\ WF^{(\infty)}(f) = WF^{\{\infty\}}(f))$$

$\iff$

$U: x^0$  の近傍,  $P: \xi^0$  の錐近傍が存在して、任意の  $\varphi \in \mathcal{D}^{*k_1}(U)$  に対して、次が成立する:

$\forall N: \text{整数}, \exists C \text{ (resp. } \exists N, \exists C) \text{ s.t.}$

$$|\mathcal{F}[\varphi f](\xi)| \leq C(1+|\xi|)^N, \xi \in P. \quad //$$

$WF_{*k}(f)$  は Hörmander [5] において定義されたものである。 $WF_{*k}(f)$  (resp.  $WF^{*k}(f)$ ) は、超局所的  $k \in *k$  (resp.  $\mathcal{D}^{*k'}$ ) に属するかどうかを特徴づけるものである。これらに対しては、 $WF(f)$  と同様の性質をしめすことができる。

1.4. 基本解  $E(P, \varrho; x)$ . 以下、 $P_m(\xi)$  が  $\varrho$  に関して双曲型であると仮定する。 $\kappa_0 = 1/\delta(P)$  とおく。 $E(x) \equiv E(P, \varrho; x)$  は、

$$\langle E(x), \varphi(x) \rangle = (2\pi)^{-n} \int_{\substack{\xi = \xi - i\gamma(1+|\xi|)^{1/\kappa_0} \\ \xi \in \mathbb{R}^n}} \frac{\hat{\varphi}(-\xi)}{P(\xi)} d\xi, \\ \varphi \in \mathcal{D}^{(x_0)}$$

によって定義される。実際、

$$P(\xi - i\gamma(1+|\xi|)^{1/\kappa_0} \varrho) \neq 0, \gamma > \gamma_0$$

であり、 $\hat{\varphi}$  に対して Paley-Wiener 型定理を適用すれば、

$E(x) \in \mathcal{D}'(x_0)$  がわかる。さらに、次の補題より、

$$\text{ch} [\text{supp } E] = \Gamma(P_m, \mathcal{V})^*$$

を得る。ここで、 $\Gamma(P_m, \mathcal{V})$  は  $\{\xi \in \mathbb{R}^n; P_m(\xi) \neq 0\}$  の  $\mathcal{V}$  を含む連結成分として定義され、 $\Gamma(P_m, \mathcal{V})^*$  は  $\Gamma(P_m, \mathcal{V})$  の dual cone である。

補題 1.8.  $M$  を  $\Gamma(P_m, \mathcal{V})$  のコンパクト集合とする。そのとき  $\exists \gamma_M > 0$  s.t.

$$P(\xi - i\gamma(1+|\xi|)^{1/x_0}\eta) \neq 0, \quad \eta \in M, \gamma > \gamma_M //$$

基本解  $E(x)$  の波面集合を評価するために、次の補題を必要とする。

補題 1.9.  $\xi^0 \in \mathbb{R}^n \setminus \{0\}$ ,  $M \subset \Gamma(P_m, \xi^0, \mathcal{V})$ : コンパクト集合とする。そのとき、 $\xi^0$  の錐近傍  $\Gamma$ ,  $t_0, \gamma_0, C(>0)$  が存在して、

$$P(\xi - i\gamma_0(1+|\xi|)^{1/x_0} - i t |\xi| \eta) \neq 0, \quad \xi \in \Gamma, |\xi| \geq C, \eta \in M, \\ 0 \leq t \leq t_0. //$$

Atiyah-Bott-Gårding [1] と同様にして、次を得る。

定理 1.10.

$$\text{WFA}(E) \subset \bigcup_{\xi \in \mathbb{R}^n \setminus \{0\}} \Gamma(P_m, \xi, \mathcal{V})^* \times \{\xi\},$$

かつ、 $(x^0, \xi^0) \in T^*(\mathbb{R}^n) \setminus 0$  に対して、 $(x^0, \xi^0) \notin \text{WF}^{(1/\delta(\xi^0))}(E)$  が成立する。但し、 $\delta(\xi^0) = 0$  のとき、 $(x^0, \xi^0) \notin \text{WF}^{(\infty)}(E)$  である。



定理 1.11.  $1 < \kappa_1 \leq \kappa_0 \equiv 1/\delta(P)$ ,  $\kappa_1 \leq \kappa \leq \infty$  とする。  
 $f \in \mathcal{D}^{(\kappa_1)'} (resp. \mathcal{D}^{\{\kappa_1\}'})$ ,  $\text{supp } f \subset \{x \in \mathbb{R}^n; x \cdot \nu \geq 0\}$ ,  
 $\xi \in \mathbb{R}^n \setminus \{0\}$  に対して.

$$WF^{(\kappa)}(E * f)|_{\xi} \quad (resp. \quad WF_{\{x\}}(E * f)|_{\xi})$$

$$\subset \left\{ \begin{array}{l} \{x \in \mathbb{R}^n; x - y \in \mathcal{P}(P_{m\xi, \nu})^*, (y, \xi) \in WF_{(1/\delta(\xi))}(f) \\ \text{for some } y \in \mathbb{R}^n \}, \kappa \geq 1/\delta(\xi), \\ \{x \in \mathbb{R}^n; x - y \in \mathcal{P}(P_{m\xi, \nu})^*, (y, \xi) \in WF^{(\kappa)}(f) \\ (resp. \quad WF_{\{x\}}(f)) \text{ for some } y \in \mathbb{R}^n \}, \kappa < 1/\delta(\xi). \end{array} \right.$$

$$WF^{(\kappa)}(E * f)|_{\xi} \quad (resp. \quad WF^{\{\kappa\}}(E * f)|_{\xi})$$

$$\subset \left\{ \begin{array}{l} \{x \in \mathbb{R}^n; x - y \in \mathcal{P}(P_{m\xi, \nu})^*, (y, \xi) \in WF_{(1/\delta(\xi))}(f) \\ \text{for some } y \in \mathbb{R}^n \}, \kappa > 1/\delta(\xi) \quad (resp. \quad \kappa \geq 1/\delta(\xi)), \\ \{x \in \mathbb{R}^n; x - y \in \mathcal{P}(P_{m\xi, \nu})^*, (y, \xi) \in WF^{(\kappa)}(f) \quad (resp. \\ WF^{\{\kappa\}}(f) \text{ for some } y \in \mathbb{R}^n \}, \kappa \leq 1/\delta(\xi) \quad (resp. \\ \kappa < 1/\delta(\xi)). \end{array} \right.$$

但し、 $\delta(\xi) = 0$  のとき、

$$WF^{(\infty)}(E * f)|_{\xi} = WF^{\{\infty\}}(E * f)|_{\xi} \subset \{x \in \mathbb{R}^n;$$

$$x - y \in \mathcal{P}(P_{m\xi, \nu})^*, (y, \xi) \in WF^{(\infty)}(f) \text{ for some } y \in \mathbb{R}^n\}$$

である。

## Part II 低階変係数である作用素

2.1. 解の構成. 以下、 $P_m(\xi)$  は  $\nu$  に関して双曲型であると仮定する。 $\xi \in \mathbb{R}^n \setminus \{0\}$  に対して、

$$K(\xi) \leq \min_{0 \leq j \leq m-1, x \in \mathbb{R}^n} \frac{m-j + n + (P_m, Q_j(x, \cdot); \xi)}{n + (P_m, Q_j(x, \cdot); \xi)}$$

$$K_0 \leq \min_{|\xi|=1} K(\xi)$$

とおく(上で、 $\min$ で定義したがこれは意味をさす)。  $Q(x, D)$ の係数は  $\Sigma^* K_1$  ( $1 < K_1$ )に属するとし、次の仮定をおく:

$$(A) \quad 1 < K_1 < K_0.$$

$x \in \Sigma^* K_1 = (K_1)$ のとき  $K_1 \leq K \leq K_0$ , また  $\Sigma^* K_1 = \{K_1\}$ のとき  $K_1 \leq K < K_0$  なるようにする。次の Cauchy 問題を考える:

$$(2.1) \quad \begin{cases} P(x, D)u(x) = f(x), \\ \text{supp } u(x) \subset \{x \in \mathbb{R}^n; x_1 \geq t\}. \end{cases}$$

ここで、 $f \in \mathcal{D}^* K'$ ,  $\text{supp } f \subset \{x \in \mathbb{R}^n; x_1 \geq t\}$ ,  $t \in \mathbb{R}$  である。まず、 $Q(x, D)$ の係数及び  $f$ の台が、コンパクトであると仮定すると、(2.1)の解  $u(x) \in \mathcal{D}^* K'$  が逐次近似によって定められる。すなわち、

$$P_m(D)u_0(x) = f(x), \quad P_m(D)u_{l+1}(x) = -Q(x, D)u_l(x),$$

$$\text{supp } u_l \subset \text{supp } f + T(P_m, 2l)^*, \quad l=0, 1, 2, \dots$$

によって、 $u_l \in \mathcal{D}^* K'$  を定義すれば、 $u = \sum_{l=0}^{\infty} u_l$  が  $\mathcal{D}^* K'$  で収束して (2.1) を満たす。一方有限伝播性が証明でき、このことより、 $Q(x, D)$ の係数及び  $f$ の台がコンパクトでないときにも、(2.1)の解が構成できることがわかる。

定理 2.1. 条件(A)の下で、Cauchy問題(2.1)は  $\mathcal{D}^{*K}$  において一意解  $u$  をもつ。

注意)  $K_0 = \infty$  のとき、 $K_1 \leq \infty$  に対して定理が成立する([12])。 //

## 2.2. Well-posedness.

定理 2.2.  $Q(x, D)$  の係数が実解析的であると仮定する。もし、Cauchy問題(2.1)が各  $t \in \mathbb{R}$ , 任意の  $f \in \mathcal{D}^{*K}$ ,  $\text{supp } f \subset \{x, x \geq t\}$  に対して一意解をもつならば、 $K \leq K_0$  である。

注意)  $*K = \{K\}$  のとき、well-posedness の十分条件は、 $K < K_0$  であり、少し gap がある。 $n \leq 3$  のときは、 $K < K_0$  が必要十分であることを証明できる。 //

この定理は、Ivrii [6] の方法を用いて証明される。

定理 2.3.  $Q(x, D)$  の係数が  $C^\infty$  であると仮定する。そのとき、Cauchy問題(2.1)が  $C^\infty$ -well posed かつ有限伝播性をもつための必要十分条件は、 $K_0 = \infty$  である。すなわち、各  $x \in \mathbb{R}^n$  に対して  $P(x, \xi)$  が  $\xi$  に関して双曲型であることが、必要十分である。 //

この定理の必要性の証明は、Ivrii-Petrokov [7] の方法を用いてなされる。

## 2.3. 解の波面集合.

定理 2.4. 条件(A)を仮定する。定理 1.11 で  $E * f$  を

(2.1) の解  $u(x)$  で、 $\delta(\xi)$  を  $1/\kappa(\xi)$  で置きかえたものが成立する。 //

証明は、(2.1) の基本解を逐次近似で構成し、各項を評価すればよい。

### Appendix

A.1.  $n \leq 3$  のときの  $n(H, S; \xi^0)$  の計算法.  $H(\xi), S(\xi)$  を §1.2 と同じものとする。

補題 A.1.  $n=2$ ,  $\xi^0 \in \mathbb{R}^2 \setminus \{0\}$  とする。そのとき、

$$n(H, S; \xi^0) = \max(m' - m, m' - m + \deg H_{\xi^0} - \deg S_{\xi^0}). //$$

$n=3$  のときを考える。  $\xi^0 \in \mathbb{R}^3 \setminus \{0\}$  とする。変数変換によつて、 $\xi^0 = (0, 0, 1)$ ,  $\nu = (1, 0, 0)$  とするようになる。

$$H(\tau, s, 1) = H_1(\tau, s) R(\tau, s) A(\tau, s), \quad A(0, 0) \neq 0,$$

$$S(\tau, s, 1) = S_1(\tau, s) R(\tau, s) B(\tau, s), \quad B(0, 0) \neq 0,$$

$$S_1(\tau, s) = s^\alpha \hat{S}_1(\tau, s), \quad \hat{S}_1(\tau, 0) \neq 0,$$

と表わす。こゝで、 $H_1$  と  $S_1$  は互いに素であると仮定してよい。

$\tau_j(s)$  ( $1 \leq j \leq r_1$ ),  $\lambda_j(s)$  ( $1 \leq j \leq r_2$ ) をそれぞれ  $H_1(\tau, s) = 0$ ,  $S_1(\tau, s) = 0$  の相異なる ( $s$  について恒等的には一致しない) 根で、 $\text{order } \tau_j(s) > 0$ ,  $\text{order } \lambda_j(s) > 0$  なるものとする。

さらに、 $\delta_j$  ( $1 \leq j \leq r_1$ ),  $-\delta_{j+r_1}$  ( $1 \leq j \leq r_2$ ) をそれぞれ根  $\tau_j(s)$ ,  $\lambda_j(s)$  の重複度とする。さらに、

$$d_{ij} = \text{order}(\tau_i(s) - \tau_j(s)), \quad 1 \leq i, j \leq r_1,$$

$$d_{ij+r_1} = \text{order} (\tau_i(s) - \lambda_j(s)), \quad 1 \leq i \leq r_1, \quad 1 \leq j \leq r_2.$$

とおき、

$$\{d_{ij}; 1 \leq j \leq r_1+r_2\} = \{l_{ij}; 1 \leq j \leq g_i\},$$

$$0 < l_{i1} < \dots < l_{ig_i} = \infty, \quad 1 \leq i \leq r_1$$

と表わす。

$$\beta_{ij} = \sum_{d_{ik}=l_{ij}} \delta_k, \quad I_{ij} = \sum_{k=1}^{g_i} \beta_{ik} l_{ik}$$

とおき、 $i(k)$  ( $1 \leq k \leq p_i$ ) を

$$I_{i(i(k))} - \alpha \geq 0, \quad I_{i(i(k))-1} - \alpha \leq 0, \quad l_{i(i(k))} = d_{ij}, \quad 1 \leq j \leq r_1$$

をみなす番号とする。そのとき、次を得る。

定理 A. 2.

$$n(H, S; \xi^0) = m' - m + \max \left\{ (I_{i(i(k))} - \alpha) / l_{i(i(k))} \right. \\ \left. + \sum_{j=i(k)+1}^{g_i} \beta_{ij} \right\}; \quad 1 \leq i \leq r_1, \quad 1 \leq k \leq p_i \}$$

である。但し、 $l_{i(i(k))} = \infty$  のとき、 $(I_{i(i(k))} - \alpha) / l_{i(i(k))} + \sum_{j=i(k)+1}^{g_i} \beta_{ij} = \delta_i$  と考へる。 //

A. 2. 例.

例 1.  $P(\xi) = (\xi_1^2 - \xi_2^2 + 2\xi_1\xi_3)(\xi_1^2 - 2\xi_2^2 + 2\xi_1\xi_3)(\xi_1^2 - 3\xi_2^2 + 2\xi_1\xi_3) + \xi_2^3\xi_3^2$  とする。もし、 $\xi^0$  が  $(0, 0, 1)$  と  $(2, 0, -1)$  と平行でないならば、 $\frac{\partial}{\partial \xi_1} P_6(\xi^0) \neq 0$  より、 $n(P_6, Q_5; \xi^0) = 0$  である。 $\xi^0 = (0, 0, 1)$  とする。そのとき、

$$\alpha = 3, \quad \tau_1(s) = \frac{s^2}{2} + \dots, \quad \tau_2(s) = s^2 + \dots, \quad \tau_3(s) = \frac{3}{2}s^2 + \dots, \\ (l_{ij}) = \begin{pmatrix} 2 & \infty \\ 2 & \infty \\ 2 & \infty \end{pmatrix}, \quad (\beta_{ij}) = \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 2 & 1 \end{pmatrix}, \quad (I_{ij}) = \begin{pmatrix} 4 & \infty \\ 4 & \infty \\ 4 & \infty \end{pmatrix}, \quad (I_{ij} - \alpha) = \begin{pmatrix} 2 & \infty \\ 2 & \infty \\ 2 & \infty \end{pmatrix}$$

である。よって、 $\kappa(P_6, Q_5; \xi^0) = -1 + \frac{1}{2} + 1 = \frac{1}{2}$ ,  $\kappa(\xi^0) = 3$  である。また、 $\xi^0 = (2, 0, -1)$  のときも同様にして、 $\kappa(P_6, Q_5; \xi^0) = \frac{1}{2}$ ,  $\kappa(\xi^0) = 3$  を得る。故に、 $\kappa_0 \equiv 1/\delta(P) = 3$  である。 $\xi \in \mathbb{R}^3 \setminus \{0\}$  に対して、 $P_\xi$  は  $\xi$  に關して双曲型だが、 $P$  は双曲型でないことに注意しておく。 //

例2.  $P(\xi) = (\xi_1^2 - \xi_2^2 + 2\xi_1\xi_3)(\xi_1^2 - 2\xi_2^2 + 4\xi_1\xi_3) + 2\xi_1\xi_3^2$ ,  
 $\xi^0 = (0, 0, 1)$  とする。そのとき、

$$\alpha = 0, \tau_1(s) = \frac{s^2}{2} - \frac{s^4}{8} + \dots, \tau_2(s) = \frac{s^2}{2} - \frac{s^4}{16} + \dots, \lambda_1(s) \equiv 0,$$

$$(\ell_{ij}) = \begin{pmatrix} 2 & 4 & \infty \\ 2 & 4 & \infty \end{pmatrix}, (\beta_{ij}) = \begin{pmatrix} -1 & 1 & 1 \\ -1 & 1 & 1 \end{pmatrix}, (I_{ij}) = \begin{pmatrix} -2 & 2 & \infty \\ -2 & 2 & \infty \end{pmatrix},$$

$$(I_{ij} - \alpha) = \begin{pmatrix} -2 & \boxed{2} & \infty \\ -2 & \boxed{2} & \infty \end{pmatrix}$$

である。よって、 $\kappa(P_4, Q_3; \xi^0) = -1 + \frac{2}{4} + 1 = \frac{1}{2}$ ,  $\kappa(\xi^0) = 3$  である。 //

例3.  $P(x, D) = D_1^2 + ia(x)D_2$ ,  $a(x) \neq 0$ ,  $a \in \mathcal{E}^{(k_1)}$  ( $1 < k_1 < 2$ ) とする。そのとき、

$$\kappa(\xi) = 2 \text{ if } \xi \parallel (0, 1), = \infty, \text{ otherwise,}$$

よって、定理 2.4 より例えば、(2.1) で、 $WF_{(2)}(f)|_{(0, \pm 1)} = \emptyset$  かつ  $WF(f) = \emptyset$  (i.e.  $f \in C^\infty$ ) ならば、解  $u \in C^\infty$  であることがわかる。また、 $WF_{(2)}(f)|_{(0, \pm 1)} = \emptyset$  かつ  $WF^{(\infty)}(f) = \emptyset$  (i.e.  $f \in \mathcal{D}'$ ) ならば、 $u \in \mathcal{D}'$  である。 //

解の波面集合の外側からの評価を定理 1.11 と 2.4 で与え

だが、基本解の波面集合の内側からの評価については、満足  
のいく結果を得ることができなかった。例によって、うまく  
いく場合をしめそう。

例4.  $P(\xi) = \xi_1(\xi_1 - \xi_2) + \xi_3$ ,  $\xi^0 = (0, 0, 1)$  とする。

そのとき、

$$(A.1) \quad WFA(E(x))|_{\xi^0} = WF^{(\kappa)}(E)|_{\xi^0} = \Gamma(P_{2\xi^0}, \mathcal{V})^*$$

$$= \{x; x = \alpha(1, 0, 0) + \beta(1, -1, 0), \alpha, \beta \geq 0\}, \kappa > 2$$

であり、 $WF^{(2)}(E)|_{\xi^0} = \emptyset$  である。実際、 $\eta(s) = s^{-1}\xi^0 -$   
 $i s^{-\frac{1}{2}}(a, b, 0)$  とおくと

$$P(\eta(s) + \xi) = \{1 - a(a-b)\} s^{-1} - i \{(2a-b)\xi_1 - a\xi_2\} s^{-\frac{1}{2}}$$

$$+ \xi_1(\xi_1 - \xi_2) + \xi_3$$

である。  $a > 0$ ,  $b \in \mathbb{R}$  から  $1 - a(a-b) = 0$  とすると、

$$P(\eta(s) + \xi) = s^{-\frac{1}{2}} P_1(\xi) + P(\xi)$$

と表わせる。  $v = 2a - b$ ,  $w = -a$  とおくと  $1 + w(v+w) = 0$ ,

$w < 0$  である。  $x^0 = \alpha(1, 0, 0) + \beta(1, -1, 0)$ ,  $\alpha, \beta > 0$  のとき、

$\lambda > 0$  と  $v, w$  ( $w < 0$ ,  $1 + w(v+w) = 0$ ) が存在して

$x^0 = \lambda(v, w, 0)$  とかける。 そのとき

$$\mathcal{F}[e^{-ix \cdot \eta(s)} \varphi(x) E(x)](0) = \widehat{\varphi E}(\eta(s))$$

$$= s^{\frac{1}{2}} \langle E(P_1, \mathcal{V}; x), \varphi \rangle + O(s), \quad s \rightarrow +0,$$

$$\varphi \in \mathcal{D}^{(2)}$$

が成立する。

$$\text{supp } E(P_1, \nu; x) = \{x; x = \lambda(v, w, 0), \lambda \geq 0\}$$

より、 $x^0 \in WF^{(\kappa)}(E)|_{x^0}$ ,  $\kappa > 2$  を得る。これより、(A.1) は容易に示される。 //

ここで述べた結果の証明等については、[13]を参照されたい。

#### References

1. Atiyah, M. F., Bott, R. and Garding, L., Lacunas for hyperbolic differential operators with constant coefficients I, Acta Math., 124 (1970), 109-189.
2. Dunn, J. L., A sufficient condition for hyperbolicity of partial differential operators with constant coefficient principal part, Trans. Amer. Math. Soc., 201 (1975), 315-327.
3. Garding, L., Linear hyperbolic partial differential equations with constant coefficients, Acta Math., 85 (1950), 1-62.
4. \_\_\_\_\_, Some trends and problem in linear partial differential equations, Proc. Int. Congr. Math. Edinburgh (1958), 87-102.
5. Hormander, L., Uniqueness theorems and wave front sets for solutions of linear differential equations with analytic coefficients, Comm. Pure Appl. Math., 24 (1971), 671-704.
6. Ivrii, V. Ja., Conditions for correctness in Gevrey classes of the Cauchy problem for weakly hyperbolic equations, Sib. Mat. Zh., 17 (1976), 547-563.
7. Ivrii, V. Ja. and Petokov, V. M., Necessary conditions for the Cauchy problem for non-strictly hyperbolic equations to be well-posed, Uspehi Mat. Nauk, 29 (1974), 3-70.
8. Komatsu, H., Ultradistributions, I, Structure theorems and a characterization, J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. IA, 20 (1973), 25-105.
9. \_\_\_\_\_, Ultradistributions, II, The kernel theorem and



- ultradistributions with support in a submanifold, J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. IA, 24 (1977), 607-628.
10. Larsson, E., Generalized hyperbolicity, Ark. Mat., 7 (1967), 11-32.
  11. Svensson, S. L., Necessary and sufficient conditions for the hyperbolicity of polynomials with hyperbolic principal part, Ark. Mat., 8 (1969), 145-162.
  12. Wakabayashi, S., Propagation of singularities for hyperbolic operators with constant coefficient principal part, Tsukuba J. Math., 2 (1978), 91-107.
  13. \_\_\_\_\_, The Cauchy problem for operators with constant coefficient hyperbolic principal part and propagation of singularities, in preparation.